

新刊集

保之部

廿八

津田文庫  
文庫 1  
1694  
24



早稲田大学  
図書館蔵書

倭訓栞前編二十八

洞津 谷川士清 纂

保の部

火をわくよむの通音なり或は唐音なりとて古書多くやとよ  
 せん自語なほ一〇穂の火より轉せり穂乃出初る色皆赤一稲穂と云  
 一久貫之集よ田すのほ家か河内所とんえり神代紀よ類とよむも同  
 江次第よ前本謂之稻切穂謂之類本類國司貯積之惣名也とんえり一鎗  
 鋒とわくよむ穂乃をなほ一〇秀字とよむ浪秀と神武紀よた  
 かとよむ應神紀よ國乃かもえとんえり穂と通つ西土よも秀出  
 之穂かきとんえり一〇最字とよむも秀と通つ一〇太とよむも  
 かり穴太乃類かり古事記よ三穂と御太とあるも同一〇百字とよむも五百  
 八百乃類かりもとほと同韻なれりいと約めずは詞かる一〇帆の穂より  
 轉せはるや遠くよりわくよむ意なほ一〇凡くわくよむはまを  
 帆よも穂よもよせり又羽と通ふかる一〇字彙掉船羽也とんえ

倭訓栞 卷之二十八

つた文庫

010190596694

〇南京福建船乃帆竹乃らどらんなり北國とすふ船も此の故なり  
〇三河郡名寶飯やうりり飯飯よ作ふ誤なり〇古書に保寶寔  
報袍なりとは乃假名を用り

△ほあ

△ほい

當時布衣乃うくせなりやういも乃倭名抄よりと訓  
似裁縫とよりかりなすれりやう院中布衣始とり御讓位乃後  
上皇初御狩衣着着御乃規式成らう唯上下成分なりやう今青侍の  
る成布衣乃音と呼方なり〇源氏よりんかの本意乃不ぬる本意乃字  
漢獻帝紀より〇馬と追乃俗語よりん乃轉なり

△ほみ

△ほ

今婦人の首服より帽子乃音なり西土乃書に面帽なりも  
帽巾乃類なり今種々の製りも實にかつる乃省略なり江戸乃婦女  
の頭面と包りか其後ハ綿より制り頭面

と覆ひ一室永乃比より乃風俗なり今のびりびりハ明ら蓋額の  
類なり北國ノ頭巾とほり唐式ノ無人帽子皆寛大露面不得有掩蔽  
と云ゆ今乃清人乃帽子頂上紅と赤と幾筋もかけり夏毛乃ゆとの次  
〇今昔物語に錦乃帽子を男もええなり〇舊詞大詞にほり  
うくし帽子と云ふは前より備へ物と前にかはなり又大  
詞にほり松皮ほり〇つと草乃移はぼり即藍  
紙なりよつと草と尾張よほり花なり  
日本紀に僧とあり法師乃音なりか書を来きり僧を  
梵語翻り〜和合も無諱もつとほり〜むき和訓乃意なり〜忌  
詞乃僧称髮長と儀式帳に法師と書り大法師侍法師承仕法師中間法師  
なり〜建武年中行事に大法師おわい法〜書り〇乃法師録倉  
右大臣集より〇法師律師乃号なり道士より出り侍者乃称非す  
とらり

律の〇〇謀及謂謀危国家とるなり〇今ハ謀判とる判ハ判



人歌合

うつくしのめし都のやううつくしきつねにおかれなき

△ほえ 近江そ柴乃細きとらり北國よの九も柴乃よりらり ○挿餅家  
よ木乃葉乃赤くく成らる火枝乃香なり

△ほと 粟花物語よ御風よてかゝ覺てほ成れとアらしきまふハ  
蒲黄よや

△ほろ 外とよあり ○ほろくほろつくれとら俗語ハ火香カカハ  
ほろひ 日本紀よ寿とよありがひ反ごかり祀とほをこよむと同一延喜式  
よ祭とよあり

ほろけ 田舎よ門戸又倉乃戸カハとよ稲のかりらめよ穂を懸く神よ奉々  
かりとらり籩蓋よも五穀取初穂掛とらんとらり澄源うくく  
とらりけえれ置けのつとらりほろけとすまらうくく  
又稲のかりて後物よわけてやま才今も同一とらり古今集うも秋乃田乃  
稲てふてもわけかりとらり頭注よの秤よかゝる物カハとらり

ほろく 朗字とよあり日本紀よ詔如靈異記よ廓ともよあり古今集よふのめ

乃ほろくくく明行くくも名義集よ益威囉迦此翻火星とらえよとて梵  
語カカハ ○諺よほろくく口とらりくくも此よ据より俗語カカハ

ほろひく 倭名鈔よ乞索見靈異記よ乞句とらり乞巧乃安人の心とらり  
被ひく物とをとりくく名つけらるかりがひ反ごかり

△ほろ 源氏よせよもほろきたるくくそまらうくくもほろけとらら詞カカハ  
とらり ○口語よほろくく折るカカハ其聲カカハ

ほろ 古書よ禱字祈字賀字壽字とらりほろくく同一  
かまらり 古歌よよあり岸險をらり今と京北山辺よらり辞也又なきとらり

又筑紫人のをさくく因幡ふくくやけとらり也西行秋り  
トつれおみかまらほろくくいよ尋ね入てをえハと一むくく

わさくく 古事記よ本岐秋之片秋也とらりやぎの祝の養とそ旋頭歌半秋也  
かまこく 祝詞式よ軟横刀時見くくも神祇令よ元六月十二月晦日大枝東西部

上枝刀讀枝詞謂文部漢音所讀者也とらり ○鬼成枝詞とらり令同一又神



轉せむなりし又ほこはくなくもらう

ほこり 日本紀の神庫とほこりともあり倭名抄の寶倉ともあり今も專業

祠とらめりほの秀のそ高きとらめり葦祠の草木岑蔚之社也とらめり

ほこり 埃とらめり火凝のそなきとらめり灰塵とらめり○算ほこりともあり奇零

たり或ハ時略ともえり○土ほこりも靈なり

ほこり 行とらめり又伐も同一秀起乃そや物とほこりともあり古今集

よほこりともあり又ほこりともあり○大神宮乃御饌の供奉所と作る田

撰字鏡と誇とらめりほこりともあり○大神宮乃御饌の供奉所と作る田

所乃御田殖乃果よハ田長の人奔論の鼓吹と送りともあり行と誇ともあり

ほこりぬ 菅家万葉と統字とらめり字ハ衣服ととも主とすきと源氏とらめり

皆ほこりぬて笑ぬとあれと訓ハ頰轉乃そ口と開く乃意なりとらめり眼のほこり

とも同一軟冬誤統暮春風の類の花のほこりぬとらめり俗よふともあり

同一新撰字鏡とらめり統と作りとも又紆ともあり俗よふともあり

又破統ともあり

ほこりぬ 日本紀の弄槍とらめり古事記にも才ゆけと見えたり才ゆけ

のそかりともあり倭名抄ハほこりともあり續紀の持槍と作る樂の名か

と宋朝の樂とて今絶たり今義解と槍ハ木の両頭銳之者即戈乃屬なり

と見えり

ほこりぬ 俗語なりほこりともあり轉とらめり語なりとらめり

△ほこり 對馬とて巫理の類の稱とらめり祝のそなきとらめり撫事とらめり古の撫物

かりとらめり違事とらめり言乃方違ハサカとらめり往昔對馬よ天童とらめり

今十家よ及りほこりともあり

ほこりぬ 神代紀の祝字とらめり火裂乃そ心火乃裂出るとらめり○俗の情と

隠さぬともありとらめりほこりともあり同家なり

ほこりぬ 源氏よそゆ菩薩也集解の菩薩ハ梵音具云菩提薩埵摩訶薩埵舊翻大

道心衆生新譯乃云覺有情とらめり并ハ菩薩と同一とらめり

神社と稱ともあり式よハ幡大菩薩宇佐宮大洗磯前サキ師菩薩明神社酒列磯

前藥師菩薩神社とらめり宇佐宮ハ應神天皇也大洗磯前の事ハ文德實錄





よめり字書に乾飯なりと云々侍中群要に已刻供朝干飯事と云埃  
囊抄に數と云々て乾飯なりと云々と云々粉を云々

正字通よよるに粉づの類なり○庭訓の類袋に兵糧なり  
ほしゆい 星合とかけり星合乃空を七夕とら星合の濱ハ伊勢一志郡にあり  
今其里にたをくく乃社存す鶴乃橋も残あり木集に

しせの海峯とふか秋の今宵寂らん星合乃と云  
○星川の負辨郡にあり ○式に星川神社と白光俊の炊り

明ぬくて空さうり行星川よあえりけやえりさうり  
又鴨長明の寺あり

かきまはり 星祭ハ関東評定傳よえり真言家ニ尊星王法ありて當年星と  
て七曜のうらに其年よあうりたは星とすなり朝野群載ニ尊星供告  
文あり○周防乃吉敷郡高原氷上山ハ多多良家より千餘年毎年二月十三日  
よ北辰尊星と祭り所なりと云○星祭嶽ハ美作なり  
ほしゆい 縦速放修の類と云り住故乃を云り神代紀に擅と云り新撰

字鏡に坂とほきまはりと云り○従と縦と同一

ほしゆい 日本紀に令貪嗜と書てほしゆいと云り其略語

かきまはり 令欲の意なり又廢匿乃を云り匿と志なりと云り日本紀に云え  
り

ほしゆい 年中行事歌合四方拜よえり元且に天子と云り星乃

名と云りかきまはりと云り

ほしゆい 乾をよめり日すはなり新撰字鏡に曝又焚と云り曝も同一萬

葉集に涼もよめり

ほしゆい 新撰字鏡に焔をよめり火吸の義あり

△かせ 哉前よ柴を云り○木の小枝あるをかせと云り關西の語也

ほせふ 神代紀に暗聰と訓せり直指校強ちと視なりと云りほせふ乃義なり

一俗にほせふと云り河合の痛乃義なり

△ほそ 和名故に臍臍成り云り倍云り東坡曰人之在母胎也母呼亦呼吸亦及口鼻

皆開而以臍連故臍者生之根也○瓜蒂とほそと云り瓜同し事李乃類

と定らる事亦雅と出く訓同し倭名鏡と云えり○工匠乃ほごころと  
のの筍も直筍も云えほごころと筍相接し射史と出くり帯と似し  
なり今ほごころと○男とほごころとたけものころの男根とほごころと  
ふりく埃囊抄と云えり

ほごころ 細とよみり○和名抄と白史と訓せり細帯乃不なる○新撰字鏡  
と賦とよみりほごころと同義とや

ほごけ 倭名鏡と契とよみり切韻と逆燒なりと云えり又燭と作る字統と  
防野火也と云えりほごころ火なりけの消ええ反けなり或は火退なりと云う  
童蒙頌韻と根とほごころとよみり

ほごのそ 膺帯とらふなり神代紀と膺とよみり○膺帯と断と續とらふ結  
とらふとらふて反語とて祝とふなり○紫式部日記と御ほごのたの殿  
乃とと待とて式正の事なりと三議一統と大御所入御なりとつと  
ひとと云えり

なごころ 細川の里の塔の岑と飛鳥岡との方とありとて万葉集とと多武の岑

と細川と云えり合せり又南洲の細川山と云えり○細川家の頼春の曾祖  
義季三河の細川に居りより氏と頼之の執事と云え義詮終と臨と頼之と子  
次卿と遣る幸とよみ輔けと云え義満と父次女とよみく謹と其教と流と  
事勿と云え建徳二年楠正儀来奔と義満とをとて河内と還り吉野と國  
らふ頼之の子頼元と正儀を援と南台神器の点と後ると云えと云く  
りみ○玄吉の源藤孝朝臣也征夷大將軍源義晴公の四男母は還翠軒義賢の女倭  
歌の圓智院公國卿より古今傳授の正統を得りり石田三成凶乱の時倭歌の  
訣次公家と云えり

古と今とわかれぬ世の中は心の種とのこと云えり

義賢の女後三閔伊賀守と嫁しり時藤孝と供と住り三閔の継子と云えり  
泉刺岸和田の城守細川右馬頭元常養と嗣と家次継と心始の前將軍義  
昭公次補佐と後と信長公と侍り豊太閤と属り又神君と従り武功のい  
めと云えり非す倭歌の道と達と云えり

ほごころ 三代實録と細長綿と云えり宇治拾遺と女乃懐東と副と云えり

赤白紅乃打たる細長とらう弄花と知る上臈乃うらうらる物チラとえ  
えうり雅亮抄と鳥子かこひのやそ長とえうり女官飾抄と皇太子の  
童乃時と召サるる幸又え又女房装束抄と用細長之時不用相袴等  
是先例也とらう

やそとの 索麵の内裡詞とらう海人藻芥とええうり  
やそどら 常の螺鈿時繪の紋皆細太刀と儀カ也とらう

ほそくづ 倭名鈿と燐とらう火屑乃チカる一〇萬信乃詔と偏郵乃  
人腰と帯と火打囊と宝藏とらう宝藏頼も其口裏の口と括とらう  
名くといつてはけそ宝藏と詛とらう

ほそこの 倭名鈿と郎と訓せり細殿と江次第と書せり延喜式と夾舎と訓  
せり

ほそとこ 細男カる一〇采花物語と御靈會乃ほそ男乃手拭とてかほつ  
たるちとえうり山城離宮八幡と木偶人乃ほそ男と名く俗物わら春  
日若宮乃細男と同一とこや

ほそぢか 儀式帳と細程とええうり延喜式と小程と書は是なり大程と  
之くふ以一把馬束とらう

ほそぢか 障とらう楚辞朱注と扱而長也とええうり  
わそくせり 源氏とえ少樂の名也倭名扱と保曾路と久勢利とええうり二曲  
也わそくも階史會要とらう疎勒とや國の名成と勢利派別の  
く記サる上は合せりわそくせりと唱末と

ほそ 材木のさそとらう楫拙とらう葦葦紀原と葦除夜燒骨融とらう  
も同一とらう山里とらうわらうとらう木とらう火立の義とらう歌とらう山  
かつのたとらうふはほくの火チとらう尾張出雲とらう伊勢と根  
こと安房と福つと総州と木下武藏と福つと又根木とらう沉のほとらう  
ぐみカとらう新撰宇鏡と燼又燧燧とらう火立炬乃義とらう一〇は  
うらうら口語もほとらう出たふとらう八瀬大魚乃里とらう  
姓婚姻と他郷と求めんといふ其意とらう

親の親子の子とらう山嵯のわと火けとらう

異方此朱陳村と同じ其始り乱と遊より起るは亦似より阿波乃祖  
谷之安徳天皇乃陵あり紀州熊野乃山中之小松家あり周防國之畜生  
所あり大和吉野乃奥之前鬼後鬼あり是も亦同一常陸國真壁郡之叔父姪  
夫婦之かたはとの多し是と逆縁とてふも似たり○伊勢乃俗よりとほ

ほぐり 羈絆とよあり新撰字鏡と申とより顔とていほぐり

絆馬前足とていなり李徳紀乃御歌より木つたてのくはくはて小木  
と足よりひつけて受かたぬとていなり萬葉集よりふふふふふふふ  
なりほぐりていなり今より足懸とて釋名と絆半也物半行使不得自縦  
也といふ○妻と帯と俗よりほぐりといふなり古今集よりいふなり  
とほぐりなり伊勢物語と世男とほぐりていなり徒然草と世男ほ  
ぐりといふなりぬきとて西室積經と妻と羈絆と説よりいなり○新撰字  
鏡と鎌とほぐりといふなり同一訓なり

ほぐり 螢と訓せり火焔乃ハエンを推し螢火即焔とていなり新撰字鏡と辨

も訓せり土ほぐり燭耀なりとていなりほぐりていなり古歌より

○螢と宇治よりいふなりとていなり今宇治瀬田乃邊より多く集りて團とれ  
〜水中より入りて俗より合戦とていなり○堀川百首より

受の昔書車流の故事なり○秋風より行はるる式といふなり文集より螢火乱飛秋已近  
とていなり○螢火とて女とていなり見る事伊勢物語より伊勢物語源氏  
卷よりいなり○貝とほぐりていなり其形状乃似るる之西より花肆よりいなり  
紫背龍シロイサナ芽なりとて草とていなり又蔓生乃名と同一くする物あり皆花とて  
名くはかり

ほぐり 海藻なり穂俵乃ヒツランゴ時乃如き物乃多くつくこととて名く古の  
かものもなりとて春盤より用ひ穂俵と祝するなり下品なりとていなり

ほぐり 伊豫よりほぐりていなり

ほちく 鳴榻曉筆風の歌と物とほちくもあつよきとていふ

△ほつす 昏て欲字とよめりほつす乃轉せはちり○要と欲と訓とを辨

兼此注よんえり

ほつす 俗語ナリ穂と摘よりいふもほつすといふ俗ニ紙字とよめり字

書乃本義よりいふ

ほつえ 万葉集よ末枝又最末枝ナリ書りほの考ナリつハ取語ナリ日本記よ上枝

とらふ如し○大工ナリとのらふ辞よほつとつけるも最末の義ナリ

ほつづもも穂末乃義ナリ

ほつ後 神武紀よ磯輪上秀真國と云えりつハ休め字ナリ

ほつらふ 俗語りほつらふつふてぼつらふとすてとなくつハ渤海乃音ナリ渤海ハ

高麗乃別種也高麗天智帝七年乙未大群采自立して渤海郡王トナリ契丹河保搜渤海攻て東丹府トセしハ我延長四年出軍ハ遼史ナリ又乙未より朝貢絶るる東丹國ハ本朝文粹よ乙未光仁乃宝龜三年嵯峨天皇の弘仁元年仁明天皇乃嘉祥二年清和天皇乃貞觀十四年陽成天皇乃元慶廿年宇多帝

乃寛平六年醍醐帝乃延喜八年又七年も来朝セリ唐よ渤海郡と云ハ蝦夷乃河より乃海と指り○深見氏ハ其先ハ高氏投化して薩州ト住ル其子長崎通事トナリて高氏トハ渤海より出るとりて深見と稱す深見ハ深海乃ト

ほつらふ 俗りほつらふと云ふも葎頭人ナリ推古紀よ見えりる法頭の

義も何り又釋氏ヲ法燈ト云ふも碩学ナリ

ほつくも老なる 帆筒標繩乃義今ハ水繩ナリ一舟乃帆柱と立ふも筒と云所

ありて船と新造するも此てとたるも家作乃上棟よと云く祝すはと云

と云ふも是よりく繩と云りより下す成ちなるも堀川百首よ

とかり舟ほつくもあかぬせよ川よ柳風ナリ波よか

△ほつて 船よつハ航手ナリ荷鋪とも云ふ○伊豫乃河よりよ手火松乃

河より火手乃不ナリ○畿内中國四國ヲ腹とほつてと云東國よほつて

と云ふも是れとほつてと云し乃詞あり古腹黒ト云ふも同し○相撲よ

と云ふ最手トかけハ倭名鈔よるも俗より聞也と云り若聞集よほつて成











又枕の渡りし時鳥とよきもあはれしと云ひ鳥とよきと云ふ

凡そ益とほくといふ

やまいづる 穂よちる衣の秋よ色よあけりて意よいつり皆稲薄葉萩ふとよ寄

しうかよのこころの秋の田れにこころ人を忘るゝめ類也伊勢物語力不い

何れども真名本と穂字成りて○帆よ出さふとあり伊勢集は行船のふと出て

と云えり○万葉集よ

と渡せありし浦よとほ火のわよとておめ好まき

とよめる火の穂とけける也

△ほぬ

△ほぬ 骨とよめる火根乃骨なりといふ○扇乃骨西土乃称も同一又橋もよめる

鞍よと橋といふ○文明のはよ骨皮といふ姓あり○骨嶋は備前よみ、靈異記

よ又少

なぶるる 瓦名枚よやよる(と)ぬりしとよ骨張る音よらふ是成り

なぶるる 林羅山乃説よ本朝俗語謂骨折といふと漢書李固傳

よ悔之折骨と云え梵經よ剥皮為紙刺血為墨折骨為筆書寫佛戒西域記

よ於是折骨各寫經典と云えり新撰六帖よ

さうとてさる事れとけふれを骨折てる君よはり

○我物故の骨折といふ俗語は衣食住の勞とる成りあり

△わのり 万葉集よ髣髴又彷彿又不明又醫字成りて新撰字鏡よ佛成とよめる

火のまのなりて新古今集の辞各よ行ありてわのりよとていふ

意あり○風聞側聞かてわのりよとて側通して仄よ世より真名

伊勢物語よ入風所道と云ふわのりよとて○わのりよのわのりよとて

皆わのり略也

ほ乃ほ 神代紀よ火融又焰とよめる火も同一火乃穂なりといふ日本紀皇子

乃名よ火穂と書り一説よ火乃をと書きて火乃尾なりといふ

ほのほ 和名抄よ窠と訓せり鳳乃栖といふ窠なり世よこれにといふもほ乃乃乃

轉なりといふれを神輿神器よ多く窠乃紋とつくるも武吉乃意なりといふ

○太刀乃柄頭と鳥よ窠乃鏝をつけたる鳳型乃窠より出する体なりとい

はり

ほ乃く 明る良なり ○人麻呂乃ほのく此詠ハ晋謝靈運詩  
中流袂就判欲去情不忍願望脰カサ未梢カサ竹曲舟已隱カサの意なる ○此歌  
古今集豫乃部入く是く豫乃意なり又哀傷部入く可くも

ほ乃めく 万葉集ノ髻髻とあり髻髻ハ彷彿ノ同 ○ほ乃めくハカサ  
及くなり ○管万葉ノ髻髻とほのくの意なる ○續古今ノ  
そりえ

△やぐ 倭名抄ノ鰓とあり魚鰓也注ノ鰓ハ胸前也といハク腹の  
一童蒙頰頰ノ腹とあり

やぐら 和名抄ノ帆檣とあり新撰字鏡ノ樹ツババありツ同 又文選ノ注  
ノ槩帆柱也といゆ

△やふ 揚弓の的を施と者と呼又やぶとて大射禮ノ一名容似今云ツ屏風

以牛草鞞漆之といえり内裡式ノ設射席以熊皮布といふ

かふり 新撰字鏡ノ栢とあり又かひとあり北斗星斗柄也注セリ

かふる 和名鈔ノ屠字とあり新撰字鏡ノ剔字とあり又剗とあり空物腸  
也注を予振の系ノ又古事記ノ斬波布理其軍士イナヒとあり同義也

△〇元龜二年九月十二日平信長屠延曆寺天正十年六月廿六日菅原利家屠  
不勤山天正十三年三月廿二日豊臣秀吉屠紀州根來寺

△ほ 神代紀ノ燂火ホといふ祝詞式ノ火ホ寛といえり燂火ホ其載春秋ノ  
也

△ほ 倭名鈔ノ頰とあり含むとほくとも居むともいへる通ふなり  
一日本紀和名抄ノ燂とほくともあるその系なり

△ほ 新撰字鏡ノ粗字とあり略字と同一約字とありとあり所  
あり又約略といふけり

ほむ 新撰字鏡ノ荊とあり花初將開也注セリふくむと通を合なり  
ほむむ 遊仙窟ノ斂咲又恐咲といふ頰笑ホ乃着ホ一花乃歌ホといふ

ほむ同 源氏ノほくもいふけり

ませたまふしつるも同義なる一

ほくろは 喉張の糸字書カッに満食ニと云えり

ほくろ 和名鈿の振とほくろちちとあり梓の如く字本を名とせ

今か立と書い暗推り誤なりとあり○平家物語の籠りほくろだてとも

又雅亮抄の車ほくろだてとも云えり○倍の竹ふと河三本よせて結

かめ足と開と物と掛とほくろちちとも云えり

△やまは 譽をよめりやめられのやめられ又また又また又め也日本紀の善哉

とよめり

△やみし 日本紀の踏石をよめり殿をやみしとよめり八雲御歌よめ

むしと云えり

△やむ 神代紀の褒美とよめり秀とよめりか詞なる譽も同

ほめふとも云えり反む也讚と同一

ほく 神代紀の踏とかくとよめりあむと通せり○書籍と本とあり

後漢書よ算本と云え皇朝類苑よ本と云えり韓文乃注よ倍文謂背

本暗記也と云えり古模印乃法なく昏寫と尊らとすとて其草

創乃本昏と云えり正本の北史よ云え中箱本と云えり小本

と云えり○大内義隆紙と明朝の渡して書籍とする北山日本

又大内本と云えり又朱氏新註五經と求むとあり○印本の鬼形乃者を

朱よと捺カスの精踏斗と云えり星乃すべとあり北斗乃魁星の文章と司ふ

と云えり源氏よほくと云えり手本と云えり○口

語よふも本乃字なる一豊後とていあつといふと○式正乃膳よ何本

立と云えり類聚雜要と云えり

やむけ 穂川の系秋の田けやむけの風花薄やむけの系萩のやむけの

ふと云えり

かむろ 神代紀の火炎ばよめり火叢の系成一靈異記の焰とよめり

ほくご 紫式日記よふるとほくごと云えり反古なりほくごの下

くろ

ほくだろ 朝野群載よ本道人以本道成業たると云えり本算道之官なり

ええら如く四道の類をれく乃本取といつ今とく醫流は外科女科  
外科の對し内科と本道といふ薩戒記と和氣丹波之一流謂之本道  
と云ふ家富記も本道乃部といふはくといふ事も云ふ後王御門朝文明  
五年に信州釋良心明に入明人に語りて曰我國二百年前有兩名医一為和介  
氏一為丹波氏といふ事神應經に云えり庭訓の當道名医といふ○西  
土の本道といふ本分の道理と指り○承暦四年高麗王求名醫丹波雅忠乃  
事百練技といふ

かんがり

鎮總子をいふ身は燃るとの也毛よく造る○燈火のふらひ茶爐の  
カハハふらひはといふ是は雪洞といふハ茶碗に出る

△やめく

全浙兵制の熱派譯せり又吸磁をかめくふらるといふ火めくの事  
也○新撰字鏡の湯又減かると俱よさめくと訓せり是同の事

△やと

△ほや

歌に信濃なるほやのすきれといふ穗屋なる諏訪乃明神乃御射山  
榮つる長官五官領家等乃造る假屋なりといふ今小縣郡は穗屋の地名あり

筑摩郡松本の東諏方郡御射山神戶乃東とてよほや野あり古諏方乃國  
稱すとい諸郡よわたりたふたる一續古今集の野原

夜寒なるほや乃薄乃秋風よきき原も妻御さかん

○七月廿三日乃祭なりとすは時候はらひかくと故に今青葙といふ  
実ハヤハハ所なりといふ○火屋といふ香爐圍爐をいふ敵ハ物  
金銀銅とりて造りたりともまき御射山乃神事乃行宮の事といふも  
倭名抄に寄生と訓せり今も美濃信濃といふ志といふ万葉集にも保  
與といふ諸木といひ花鳥餘情に窠敷ともいひ石葦といふ小艸なり  
といふハ別物なり○上野の柴といふ倭名抄に老海鼠とも訓せり延喜式

參河國保夜一斛といふ今章實枕に似て色赤く大なる物とい  
る海産録に朱巖といふそり土佐日記にほやのつまはといふ  
一貽の貝の殻也延喜主計式に貽貝保夜交錯といふ李吟の交といふ  
よきよき麵のつは吸といふつまなくも意といふ又五雜俎に海鼠一名海男  
子其狀如男子勢然淡菜之對也といふ余皇日疏に文嚙似女陰といふ文

啗も淡菜なりいづしとらふ又東海婦人乃名あり海錯録に誰謂之東海婦人耶當謂西施不潔とらふこれ陰陽乃形に似るとして妻とハ戯れとらふなり○多識編に石脚とあり○蝦夷とて数乃子とあり○相馬百官に梅干とありいづれはのちとて色の赤とて老海鼠に似ると云ふなり

ほやけ 日本記に失火とあり三代實録に淳和院乃失火之穢とあり儀式帳に川入火燒くとて國津罪乃内に入ると云ふれは吹傷とらふとや或は吹燭とや○類火と延藝とらふ

△ほや 和名鈔に犬と吠とらふ牛と吼とらふ狼と嗥とらふ乃類なり

△ほよ 寄生乃ほやと同一とて万葉集に

ほよほよ乃山ぬるぬる乃保與りてかざりつらふ年ほよほよと

△ほら 洞とありほらとらふなまたり新撰字鏡に洞又峭嶮とあり文章記に内の窟良とてえも○ほら乃かひの盡之大者南蛮國吹之節樂とて又

法螺とも寶螺とも云え武備要略に吹螺と書り是中古より專軍器に

用ありとてなり宋東南夷傳に林邑國人吹海螺為角とて又武備要略に本考に吹海螺為哢とてえなり

タモト葛城山乃高嶺より狩童くふけり音すなり

又梵貝とも稱せり本州に梭尾螺形如梭今秋子所吹者くらしも是なり質愚經にも軍貝と吹すなり手經に一切諸天善神と招き時人よ宝螺と手よすなりとてえなり又木集に

山伏の腰よりけりほら貝ふくふとて此秋夜乃月

○宝螺乃出たり明應八年六月大風雨乃夜遠州に此事ありて濱名乃湖とらふ間乃陸地とらふ入海とてなり此類諸國にあり龍乃出るとも同一とてなり五雜雑に閩中不時暴雨山水驟發漂没室廬主人謂之出蛟理或有之大九蛟蜃藏山穴中歲久变化必披風雨以出或成龍或入海とてえなり○洞貝餅乃名あり○保良宮に近江にあり續紀に甲賀郡敷使村也今蠶洞と呼又瀬近洞と呼り○織物とてあり○琉球とて民間の吹響と多く螺殼と用るとあり







△かきく 倭姬世記よりくくくくくく今去摩國伊雜宮に坐す神祇百道

度會元長

秋の日の穂落乃神乃古とかりへ久く霧乃万代

霧と神とくくく岳陽風土記よりくくく岳州に免とりて神くく巴陵に雉と

くく神とすくくく

カ

倭訓栞前編二十八終



Handwritten signature or notes in blue ink at the bottom left of the page.

